

## 変容論的アプローチによる恐慌論批判

### —— 周期的景気循環論から相としての景気循環論へ



【『労働市場と景気循環——恐慌論批判』

(東京大学出版会、二〇一四年)】

小幡道昭(東京理科大学非常勤講師)

#### ■批判的方法

どういふものか、大学教師というのは辞めるころになると、何かまとめなくちやと、さもしい気持ちになるようで、私も二〇一二年に『マルクス経済学方法論批判』、二〇一三年に『価値論批判』、二〇一四年に『労働市場と景気循環——恐慌論批判』をあたふた刊行した。三番目の本も『恐慌論批判』にしたかったのだが、書肆営業上「批判」は罷り成らぬどのお達しで副題に止めた次第、時流といえればこれが時流なのかもしれない。通説をラディカルに批判するような研究は素人じみてみえるのか、昨今あまりはやらない。そういう口

マンティックな研究は、昔話として面白おかしく語られることはあっても、現実には既存の知見の一つ一つ小石を積み重ねてゆくような研究ばかりが専門家の仕事として罷り通るご時世である。

愚痴は兎も角、このようなラディカルな批判的方法を私は宇野弘蔵から学んだ。といってももそのご尊顔を拝したことは一度もなく、ただその著作のうちに、まづ『資本論』をできるだけ正確に「解釈」し、次にその主張の当否を独自に「批判」する二段構えのアプローチを読み知ったに過ぎない。もつとも、こうした批判的アプローチ自体は宇野のオリジナルではない。元を

質せば、マルクスの古典派経済学批判に由来するもので、宇野はこれを本家本元の『資本論』に向け徹底したのである。

### ■純粋資本主義批判

むろん、宇野の『資本論』批判は、批判のための批判ではなかった。それは、眼前の資本主義が、『資本論』の舞台である自由主義段階から、新たな帝国主義段階へ大きく転換したという認識に基づくものだった。資本主義の歴史を、生成・発展・没落の三段階として再構成するためには、労働力商品化を基礎に資本の運動を通じて社会的再生産が全面的に編成処理される「純粋資本主義」が必須であり、この再構築のために『資本論』批判が不可避だったのである。この純粋資本主義を基準に、そこから乖離し不純化する過程として帝国主義段階を概括する方法は、宇野が直接念頭において第一次世界大戦に至る古典的帝国主義の時代をこえて、第二次大戦後の冷戦下の福祉国家型資本主義をも説明しうる予想外に長い射程をもっていた。

とはいえ、浮沈は世の常、一九世紀末に匹敵する地殻変動が二〇世紀末に再度資本主義を襲った。新たな資本主義の勃興を底流とするグローバルイズムの見慣れぬ現実を眺めるにつけ、宇野が『資本論』に対峙したのと同じ目線で、今度は宇野の体系を批判するに如く

無しとの思いが募り、『マルクス経済学方法論批判』では、純粋資本主義論的アプローチにかえて、外的条件が作用する開口部を明示する変容論的アプローチの必要性を説き、『価値論批判』ではこの変容論的アプローチの効果を原理論の出発点まで掘りさげ確かめてみたのである。

### ■労働市場の原理

かくして『労働市場と景気循環——恐慌論批判』では、同じアプローチの有効性を確かめるべく、今度は逆に原理論の終わりに向かって掘り進めてみた。この作業は、書名の通りの二つの段階からなっている。

第一段階は、原理論のうちに労働市場の存在をビルトインすることである。労働市場なら宇野の『経済原論』で充分説明されているのではないかと思うかもしれないが、産業予備軍が常駐する労働市場の理論は意外にも空白地帯をなしている。純粋資本主義のもとで産業予備軍はどうやって食べてゆけるのか、などというのは世界資本主義の愚問、原理的に答えられぬ問題はひとまずブラック・ボックスに入れておき段階論で考えればよい、といった丸投げが生んだ盲点である。たしかに、産業予備軍のような「事実」を生のまま無神経に原理論に持ちこむのは愚かである。かといって、何でもかんでもゴミ箱に放り込み小綺麗な庭をた

だ護るのも虚しい。原理論を空転させてきたこの愚虚を脱する道は何か。答えは「事実」の徹底した「抽象化」である。この意味で、産業予備軍を市場一般の観点から抽象化すると何に転じるのか。藪から棒にきこえるかもしれないが、それは「在庫」となる。

貨幣で何でも買えるのは、売れるのをまつ商品在庫が充分存在するからである。しかし、このような在庫がひろく存在する市場を理論的に説明することはかなり厄介な問題になる。売れないなら価格を引き下げるという需要供給の法則から疑ってかかる必要がある。ここから先は、藪こき状態になる。ほとんど手がかりがないなか、しかし、考えてみればだれでも知っている。「貨幣が実在する市場」のすがたを理論的に再構成しなくてはならない。唯一の頼みは、商品には価格と違う価値があるといった日常の言説であり、この言説を分析し厳密に再規定することで、多数の売り手が同種大量の商品を競争的に売りあう市場ははじめて理論化される。

こうして貨幣が実在し在庫が充填された市場の一般理論を再構築することで、産業予備軍もはじめて労働市場における特異な在庫として分析可能となる。この暗中模索の過程は拙著に譲るほかないが、ともかくこの藪から抜け出すことができれば、「労賃は労働力に対する需要供給の関係できまる」という通念を捨てて

ことができる。産業予備軍が存在する以上、ただ雇用が増加したからといって賃金率（時間あたり賃金額）が上昇することはないし、単に雇用が縮小したからといって賃金率が下がるわけではない。賃金率を引き下げるには、労働過程に介入し既存の技能を分解しリストラをはかつてゆく必要がある。さらに産業予備軍が単に労働市場のバッファとして機能するだけではなく、雇用された労働者を含む社会的な生活過程で果たす独自の役割を統合するなど、いくつかの拡張を通じて、労働市場の複雑な性格ははじめて原理論の対象となるのである。

### ■景気循環の原理

労働市場の理論化は、好況・恐慌・不況という局面を時間の流れに沿って順次記述してきた既存の景気循環論に対する批判という第二段階の基礎になる。資本主義経済は、産業予備軍を吸収しながら安定した賃金率で社会的再生産が拡張する好況と、賃金率は徐々に下落しながら社会的再生産の拡張が停滞する不況が基本の「相」をなし、景気循環は労働市場をベースにしたこれら二つの「相」の交替として規定される。

ポイントは、これらの相の規定に必要な条件だけでは、好況から不況、不況から好況への相転移の規定には不充分だという点である。言い換えれば、同一の抽

象レベルで、好況・恐慌・不況と並べて説くことには無理があることになる。資本主義である限り、好況と不況の交替は免れず景気循環は不可避だが、しかし、相転移の様相は追加的な条件に左右されて変容する。好況から不況への転移が必ず激発恐慌を伴うとは限らず、不況から好況への転移がスムーズに進む保証もない。この相転移のレベルの理論を構成するには、流通過程に貨幣や商品在庫をかかえ、固定資本に制約された個別産業資本の利潤率構造を分析し、また単純な資金需給説に頼ってきた利子率決定の原理を、銀行資本の利潤率にリンクさせて内的に規定するなど、かなり面倒な議論を重ねなくてはならないが、この詳細も拙著に譲るほかない。

ただこれだけでも、資本主義の自立性の証とされてきた従来の景気循環論との断絶は明白であろう。自らが立脚する市場の一般理論を自覚すれば、「資本の生産物とはいえない労働力商品の価格たる賃金率は、ただ需要供給の法則にしたがって、景気循環のうちに上昇下落を繰り返すのであり、そうした変動を通じて労働力商品の価値の大きさは規定される」という命題が、貨幣と在庫が存在する市場の一般理論に背馳し、産業予備軍が常駐する労働市場と整合しないことはわかる。こうして、資本主義の基本矛盾は労働力商品であ

り、資本主義はこの矛盾を激発、恐慌を伴う周期的な景気循環を介して内的に解決できるといふ純粹資本主義の基本命題は棄却せざるをえないことになる。

### ■原理論から見た段階論

では、この棄却はどのような出口につながっているのか。資本主義の自立性の証とされてきた周期的景気循環論にかえて、開口部を明示した相としての景気循環論を再構築することは、純粹資本主義論をベースに資本主義の生成・発展・没落を解明する発展段階論の再構成につながってゆく。

この道をたどって私は、イギリスを起源に生成・発展し、それが欧米諸国や日本に広がるなかで爛熟したとみる資本主義の単一起源説にかえて、資本主義は異なる時期に異なる国・地域で群発するという多重起源説にたどりついたのだが、これはまだまだ試論の域をでない。とはいえ、生成・発展・没落のシナリオでは捉えきれない、東アジア・東南アジアに典型的にみられる二〇世紀末の新たな資本主義の勃興は、段階論の再構成のみならず、原理論の再構築を迫っているのは明らか、されど難問山積のまま定年を迎え、なお未熟にして無頼の故か、人影の絶えたマルクス経済学の荒野を一人迷い彷徨う羽目と相成った次第である。